



友の姿

俺達はいつも一緒にいる

どこに行くにもだ

その出会いは本を貸してやるといきなり言われた

そして本を破った

俺はいつもなぜか隣にいるお前をなぜそこにいるんだとは思っていない、いつも隣にいるからだ、でもほとんど喋らない。「お前、いつも隣にいるけど、なんで喋らないんだ?」「……」  
「なあ、喋らないと、何にも伝わらいぞ」「うん、俺は……」「お前な、何にもできないじゃねーか、そんなんで生きて行けると思うなよ」「生きる?」「お前、死んでんのか?」「死んでる」「たく、死神なのかよ、でもな、お前が横にいるとなんか落ち着くんだよな」「……」  
「やっぱ、落ち着かない、じゃあな」「……」俺は本を破った事を謝りたかったけど、謝る事を辞めにした。そしてあいつには近づかないと決めた。自宅に戻って、シャワーを浴びた、そして寒気がした。「な、なんかいる」鏡に映ったなんかの姿があいつみたいだった。そしてピンポンと音がなった。そして母が対応した。「バン、お友達よ」「えっ、誰?」「ツネ君よ」「あー帰ってもらって」「なんでよ、せっかく来てもらっているんだし」「あいつ、何もしゃべんないから、嫌いなんだよね」「そうなの、でもあんたもあんまり喋らないじゃない、私たちと、だから、喋ってきなさい」「たくダリーな、珈琲飲むからお金頂戴」「缶コーヒーでいいわね」「いや、どっかカフェ行ってくるから」「ちっ仕方ないわね」ケチな母が1万円くれた。  
「お前、何しにきたんだよ。」「俺、お前の友達になりたいくて」「気持ちわりーな、お前は友達じゃなくて、珈琲友達だ、わかるか?」「俺、珈琲飲めないんだけど」「だからな、俺が教えてやるよ」「とりあえず、缶コーヒー飲んでみろ」近くの缶コーヒーを買う「ほら、これが缶コーヒーだ」ゴクゴク「どうだ?うまいか?」「まずい」「最初一杯はまずいんだ、でもな飲んでいるうちに最高にうまくなる、間違いなくだ」「これを飲めば友達になれるのか?」「だから友達じゃなくて、珈琲友達だわかるか?」「知っているか、珈琲にはタバコを吸うといいらしいぞ?」「バカだな、タバコはダメだ」何とツネはタバコを持っていた。「今日買ってきたんだ、お前と吸ってみたくて」「何だそれ、ニコチン中毒になりたいのか?俺は吸わないよ」「一本だけ珈琲友達になりたいから、吸わないか?」「吸わない、言っただろ珈琲友達って、だから、お前が嫌なんだよ」いきなりツネがタバコに火をつけた「バ、バカ、辞めろ」ツネはむせかえった。「こんなマジーもの吸ってんのか」「バカだな、でも、意外と男らしいところあるんだな、タバコなんて吸うとは思わなかった」「実は今日、お前とタバコ吸おうと思った、友達になって、だから友達の証にお前もどうだ?」「いらねー」「きっと将来、お前タバコ吸うよ」「かけるか?」「あーいいぜ。俺はお前が吸うに1万円」「楽勝すぎる」「じゃあ日にちを決めよう

、そうだな、5年後の今日にしよう」「しかも、この自販の前でだ、1万用意しとけよ」「って事は5年後も友達って事だよな」「仕方ないな、友達なってやるよ、でもな、いつも一緒にいたけど、お前何も喋らないのに、何で喋ってんだ?」「実は恋人ができたんだ」「えっ、いきなり?」「3日目何だけど、彼女がいっぱい話してくれるから、少し喋れるようになったんだ、そして、お前と友達になれって言われたのと、お前しか友達いないから、もっと仲良くなりたいなって思って」「何だよ、その彼女紹介しろよ」「いいよ、めっちゃ可愛いよ、ただ手を出すなよ」「でも、今日はカフェに行こう、女は後だ」二人はカフェに向かって歩き出した。いつも一緒にいた彼らは全く喋らなかったなのでお互いの事を何も知らない。以外にも似たような共通点が多かった。好きな芸能人とか、野球のチームとか。好きな音楽とか。そんな話をしているとあっという間に目的のカフェに着いた。「いらっしゃいませ」「こんにちは」「あちらにどうぞ」俺はカフェに入ってみたかった。初カフェだ。俺はドキドキした。そしてオシャレで美味しそうな料理が沢山あった。「おっ、おい、何にする?」「珈琲だろ」「だからな、珈琲にも沢山種類があるだろ」「俺さ、珈琲以外にも料理食べたいんだけど、なんか注文してもいいか?ここは俺のおごりだぞ、よく覚えておけよ」「おごってくれんの?でもいつかちゃんと返すから、安心しとけよ」「とりあえず、俺の好物、スパゲッティー食っていいか」「俺はカレー食べようかな」「お前、カレーか、カレーうまいよな」「俺ん家のカレーうまいぞ」「マジかよ、今度お前んち行く」「お前ん家にも行っていいか?」「あーもちろんだ、俺の手料理食わせてやる」「お前、料理できんの?」シチューならできる」「じゃあシチューパーティーだ彼女も呼んで」「じゃあ友達呼んでもらって、みんなで食べよう、すげー可愛い友達いるって言ってた」「えっマジで?」「あー俺の彼女可愛いよ、本当に、ちょっと自慢になっちゃうけど」「友達も興味あるって」「そうか、じゃあこのあと服買いに行こう」「お前ださいもんな」「えっ、俺ダサイの」「だってアニオタみたいだもん、アキバ系、もっと普通くらいがいいと思うけど」「いやいや、俺のファッションに普通はない、やっぱ裏原でしょ」「近くに中古あるから行ってみる?」「何でお前知ってんだよ」「だって俺の彼女、ファッションデザイナーだもん」「何っ!」「友達もファッションデザイナーだよ」「あー俺夢何だよな、服作れる人、なー俺達もなんかやんねーか」「何やんの?」「だってさださくねーか、あっちはものづくりで、こっちは何もやんないってなんか嫌じゃん」「俺やっているよ」「えっ」「ゲームデザイナー、誰にも言うなよ」「じゃあ、教えろよ、俺もアニメ相当みてるし」「それを、待っていたんだ、相当勉強したんだぜ、お前の案がきつと世界を変えるよ、難しいけどな」そして珈琲が来た。「これがカフェの珈琲か」「オシャレだな」「そして、うまい」「あー珈琲ってこんなに美味しいんだな」「だって珈琲友達だろ」「嫌な、俺達は親友だ。誰にも言うなよ」「あー、二人の秘密だ」そして最高にうまいスパゲッティーを食べ、カレーを食べ、服屋に向かった。裏原系の服が沢山あった。そしたら、ツネの彼女がいた。「何、やってんの?」「カフェでご飯食べて、ちょっと服でも見ようって、こちらが噂のバンだよ」「あーバン君、初めまして、私がオハ、よろしくね」「よろしく」「『かっ可愛い』心の中で思う。「実はこの後友達と会うんだけど、一緒に行かない?バン君に紹介したいの。「えっ、いいすよ」俺達は服屋を出て、友達が待っている公園に向かった。「私の友達エリちゃんって言うの、とっても可愛いよ、友達になってあげてね」「僕ら、一緒にゲーム作る

事にしたんだ」「あーそうなんだ、バン君とやりたいって言ってたもんね、夢叶ってよかったね」  
「僕のアイデアとしては、ボタンを押すと歌詞ができてなんかテーマにするとすぐに歌になるのを作りたいんだ」「歌より、本ができたら面白いわね」「時代って何でもできるね」「それだから、頑張る事って大切なんだけどね」「僕は食べてれば幸せだけどね」「それって本当だね、食べてれば幸せね」「家の中で簡単に野菜が育てられれば、買わなくて済むのにね」「なんか壁とかに土が着けばできそうね」「それ面白そうだね」「自然は甘くないけど、もう時代が家の中だもんね」「そうじゃない、外に出るから、楽しいのよ」「人と人の付き合いだもんね」「俺達も俺達だけじゃなくて、人に触れないとね」「学校行事も頑張ってみるか」

公園にはエリが待っていた。「待ったー」「ううん、待ってないよ」「ばったり彼氏に会ったの」「こちらがツネ君」「はじめまして、ツネです、ゲームクリエイターやってます」「へー噂に聞いていたけど、意外とオタクではなさそうね」「ゲームについては知らない事はないですよ」「こちらが今日初めて会ったバン君」「はじめまして、バンです、特技は食べる事です」「ははー、私も食べるの好きー」「二人でこれからゲーム作るだって」「えーゲーム作るんだ、凄い」「ボタン押すと、歌詞になって歌ってくれるのを作ろうかと」「あと、本もね」『エリさん超可愛い』」バンはドキドキを超えて緊張していた。「バン君はちょっとダサイわね、あなた引きこもり?」「いえ、雑誌で情報集めてて、今日ツネと初めてカフェに行ったんです」「食べるのが好きならカフェハマるわね」「今日のスパゲッティー凄い美味しかったんですよ」「はは、食べる事しか頭にないのね、可愛いわね」「なんかファッションデザイナーなんでスすってね、聞きました」「私、有名なのよ、もう賞とっているのよね」「そうなんですか、お綺麗で、ファッションも素敵です」「あなたも、人はいいから、少しダイエットして、かっこいい服着ればモテるわよ」「そ、そうですね、頑張ってみます」「で、これからどうしようか?」「夜だし、近くのクラブでも行こっか」「クラブだとめんどくさいし、オハの家でご飯でも食べようよ」「うちはちょっとな、ツネのうちは?」「うちかー、そうだな、うちでもいいよ」「じゃあ、コンビニで沢山買って、僕がおごりますから」「あら、本当、そうしましょうよ」「ツネの卒アル見て笑おうよ」「卒アルかあ、自信ないなあー」「通知表もチェックするからね」「バンお前、家帰って通知表持ってこいよ」「お前、俺頭いいの知らないだろ、オール5なんだぞ」「えっ、お前頭いいの?全然知らなかった。じゃあ持ってこいよ」「仕方ないな、持って来てやるよ」「30分後にお前の家行くから、それとコンビニで買ってくるから、家に行ってて」「デザート忘れるなよ、それと家からビール持って来てね」「飲んじゃいますか」「私も初めて飲むのよ、飲んでみたかったのよ」「私も、いっぱい飲みたいわ」「わかりました、必ず持っていきます」そして、バンは自宅へと向かった、そして三人はツネの家へと向かった。バンはエリに惚れてしまった。バンは世界一美しいと思った。でも、相手にしてくれないだろうなと思った。可愛くて、カッコよくて、しっかりしている、僕の事は相手にしてくれないだろうなと思った。だからなんだか全力で走った。今まで生きてきて、あんなに努力している人を見た事がなかったからだ、俺は俺で頑張って勉強してきたけど、上には上がいる、それを目の前にして悔しかった、そして惨めだなんて思った。気づいたら家の前だった。そして玄関の前で泣き崩れた。「エリー、好きだー」一目惚れだ。そしたら母が出てきた。「なにしてるの?」「あっいや、ちょっと」「好きな人できたんでしょ、だって、エリー好きだーなんて言って、あんたなら大丈夫よ、気持ちを素直に伝えなさい」「だって綺麗で、有名な人なんだ」母がビンタした。「男なら力づくでも物にするの、愛はね、恐ろしいのよ、それくらいの女じゃなければ捨てなさい」「それくらいの女なんだ、今日しかないんだ」「じゃあおしゃれしていきなさい」「見た目は大事よ」バンは父の部屋に入りスーツを着た。『やっぱ告白にはスーツだよな』と心で思った。そして通知表とビールをパクって家をでた。そしてエリを思ってダッシュした。俺は思った、これ以上の女はいない。

今日言わなければ、もう二度と言えないだろう、だから言おう。ダメでも、彼がいても、俺の気持ちを伝えるだけだ、わかった、最初に言おう、会ってすぐ、その方がいい。緊張して言えないより言った方がいい。よし、花買って、告白しよう。そして、花を買う前に無我夢中で走ったらツネの家だった。花は結婚の時にしよう。よし、会ってすぐ、告白だ。ピンポン。「おー着いたか、入っていいよ、お前なにスーツなんだよ」「俺なエリに告白する」「本気か?」「あー本気だ、お前には感謝している、今しかなんだ、だから行ってくる」ドアを開ける。「あーバン君、、、」「エリさん付き合ってください」「ん?なに?」「ぼ、僕と付き合ってください」「誰に言ってんだ、このダサ男が、自分の顔見てから言え」バンは泣き、走りだした、そして、ツネもバンの後を走った。バンは叫んだ「エリのばかやろー」ツネは言った「お前がバカなんだー」バンとツネは走り続けた。そして近くの海にでた。バンは寝そべって泣いていた。ツネは言った。「あんな素敵な女性他にはいない正解だよ、バンに似合う人がいるって」バンは海に叫んだ「うおーーー!」「お前のおかげで俺まで別れちまう事になるかもな」バンは叫んだ「俺はバカだーーー」

バンとツネは歩いて帰った無言だった。別れ際にツネが言った「諦めないのも一つの手だぞ」バンは思った、『出会ったのは、今日だったんだと』少し焦り過ぎてしまったと後悔した、もしこれからがあるなら、いや、「今」謝れるなら謝ろうと思った。「ツネ、今からお前の家行っていいか？まだいるかもしれないだろ」「そうだな、うち行ってみるか」二人はコンビニへ行き、食べ物を買って向かった。そしたら、オハとエリはいた。「何やっていたのよ」二人はバンが置いて行ったビールを飲んでベロベロだった。「遅いー」とオハは言った。「たくね、告白なんて慣れてんだよバカ、それよりあんたの通知表みたわよ、本当にオール5じゃない。あんた先生にでもなったら？大学はどこに入ろうと思っているのよ」「ご、ごめんなさい、つい舞い上がっちゃって」「気にしないで、、、」「俺は慶応狙っているんです」「私は東女よ」「私も東女」「実は僕は東大」「じゃあ、僕も東大にしよう」「じゃあさ、ここでみんなで勉強しようよ、そうだな、毎週日曜日、みんないると励みになるし」「そうね、いい案だわ、あんた達がいいって言うなら集まるけど」「俺はいいけど、バンは？」「ついでにゲームも作るんならね、パソコンないから買わなきゃ」「それってどっちなの？」「僕も仲間に入れてもらえるなら」「あんたに服作ってあげるよ、だから、そのダサイ服捨てちゃいな」「きっと僕が教える事になると思うけど」「調子にのるなデブ」「デブだからダイエットしな、毎日走れ」「お前ら、ちっとは静かにしろよな」そして毎週日曜日、ツネの家で勉強する事になった。二人はもうお酒を飲んでいたが、バンとツネは飲んでいなかったの、ビールを飲んだ。「乾杯」初めてのビールはまずかった。あつという間に酔って訳がわからなくなった。ツネはオハに問い詰めた「なんで、俺に告白したの？」「私ね、実はあなたのゲームのファンなの、近くの学校で友達もいないのにこんな事できるってすごいなって、それでね、あなたに手紙を渡したの、すごい勇気がいたんだ。でもねこうして話ができているだけで嬉しいの。私はあなたで変わったの、頑張る素晴らしさを肌で感じて」「俺なんかまだまだだよ、でもねオハのためなら頑張れる気がするんだ、もし、俺達が別れても、俺はオハが世界で一番好きだから。お互いどんな形でもここに来ていいからね」「じゃあ、一生の彼氏であり一生の友人なんだね」「僕は別れなんて考えた事もないけどね」「私は最初の方は別れようか迷ったけど、だってダサイだもん、しかも、話さないし」「俺、勉強し過ぎて、自分の事で精一杯で、周りまで気にできなかったから、人間もちょっと怖かった、オハに出会って、人間のありがたさに気づけた、とても感謝してる、これからはバンと学校生活も楽しくしていくってさっき話した。周りの人は全然知らないから、色んな人と話して理解できればって思うよ」「私はあんまり男の人好きじゃないから、ツネと出会って、少し男の人理解できたかな、でも、男って汚いから基本嫌いだけど」「働いていかないといけないからね、それは僕もそう、男の方がきっと辛い人生な気がするし」「私は働こうと思っているよ」「無理はしない方がいいと思う」「だって家にいるの嫌だもん」「やり方次第だと思うけど」「そうかもね」バンとエリはバクバクご飯を食べていた。二人はこの話を聞いていたのだろうか、きっとご飯に夢中で聞いていなかっただろう、恥ずかしくて、こんな話はいつもはできないけど、酔った勢いで話したい事が言えたのは、本当に良かった。「そー言えば、卒アルみてたくない」「そうだ、卒ア

ルみてないぞ」「ツネの中学時代見ないとな」「初恋の相手は誰だ？」「お前ミカだろ」「ミカじゃねーよ、テラが初恋だよ」「今、なにしてっかなテラ、高校は別になったからな、久しぶりに卒業文集読んでみっか、一回も読んだ事ないし」テラの卒業文集を読んだ。『私はモデルになりたいです』「テラって女優になりたかったんだ」「その子、可愛いの？」「結構可愛いよな」「中学時代はモテた」「今度合わせなさいよ、調度モデル探してたのよね」「わかった、家も近いし行ってみるよ」「ツネの卒業文集も見ようよ」「えー俺のか、何書いたか覚えていない」「きっと、くだらない事よ、マジシャンとか」「中学の時の夢か、確か、バンと遊園地に行きたかった気がするけど、それも叶わなかったかな」「二人で遊んだり本当にしなかったの？」「全くしなかった、いつも一緒にいるのに」「唯一、朝のおはようだけは何回か言った記憶がある、確か、僕の卒業文集は『おはよう』って書いたような」「あった、違うじゃない、『言葉』じゃない、そして、ありがとう、ありがとう、ごめんなさい、ごめんなさい、それが僕の思い出」「はは、これって卒業文集じゃないね、もっと思い出書かないと、今、ここに書いて」ツネは卒業文集に書き足した。『しあわせ、しあわせ』「何がしあわせなのよ」「これから、みんなと話す機会があった時、みんなが幸せだといなって思って」そして、4人は眠りについた。



朝は早く起きて、みんな自宅に戻った。そして学校だ。バンとも学校で少し生徒と話してみようって話していたので、胸が高鳴った。学校に着くとそこにはバンがいた。「おはよう」「おう、おはよう、俺達は俺達のいつもの感じでいいよな」「特に喋らなかった、けど、それが良くない」「どーすればいいんだ」「わかった、手紙を書こう」「手紙か、なんか男らしくないな」「俺達、ゲーム作るんだし、ゲームオタっぽい人がいいんじゃない？」「そうだな、黒板に書くななんてどーだ」「ゲームオタ募集って」「それいいな、早速いくぞ」2人は早くに学校へ行っていたので、黒板に書いた、『ゲームオタは話しかけて下さい、ツネ』と、そしたら1人ウニという男が話しかけて来た。「おう、俺達ゲーム作っているんだ、お前も、ゲーム作っているのか？」「あー俺も作っている、どんな作品なんだ？」「今は、ボタンを押すと、勝手に歌詞ができる、テーマに合わせて、そんなの作っているんだ」「面白そうだな、俺も仲間に入れてくれないか？」「お前は、どんなの作っているんだ？」「俺は、空の雲を色んな雲の絵に変えられるゲーム作っているんだ」「空の雲？」「わたあめみたいで可愛いだろ」「それをデータにして3DにしてPCと連動したら面白そうだな」「お前、学校は楽しいか？」「ぼちぼちな、今日さ、うち来ない？ゲームでもしよう」俺達はコソコソと話した。「いきなり家に来いなんて奴、信じれるか？」「でも、企画的には面白いな」「カフェならいいんじゃないか、俺達、珈琲友達だし」「カフェなら、どんな感じかわかるしな」「どう？」「あー、今日授業終わったら、カフェ行かないか？」「午後ちょっと忙しいんだよな、お前パソコン持ってる？俺さノート持っているから、昼休み屋上のベランダで俺と一緒に作品作らないか？」「あのな、俺達はあくまでも俺たちだ、今回の一緒にの企画は初めて会ってまだ信頼してないから、今回は辞めとくよ」「そうか、昼は弁当か？学食か？」「弁当だよ」「じゃあさ俺も弁当だから、一緒に昼食べないか？」「それなら、いいよ」「ベランダで食べるなんてどうだ？」「ベランダか」「天気もいいし、ベランダでいいんじゃない？」「そうだな、じゃあ昼にベランダで」「あいよ、いつも2人で何してんだか、気になっていたんだ、まさかゲーム作っているとは思ってしなかったけどな」「実は2人でゲーム作るのはまだやっていないんだ」「俺はもう頭の中ではできてるよ、言わないけどな」「なんだよ、早くそういうのは言えよ、お前のアイデア楽しみにしたんだからさ」「たぶん、ヒットするぜ、今のアイデアもウケると思うけど、あいつのわたあめ3Dも結構面白いけど、結果、食べられないし子供っぽい。俺のアイデアは時代を変えるぜ」「まっそういう事だ、じゃあ昼ベランダで」授業が始まる、ツネはバンが言っていた、時代を覆すアイデアが気になっていた。それを作ると未来が変わる、それを作ると、何かが変わる、それが俺は怖かった。授業に集中できなくて、隣のミモに話しかけた。「あのさ、時代を覆すって、どうゆう事？」「革命って事だと思うよ」「それをやるとどーなるの？」「雑誌とかテレビとかに出るのよ」「そうかー、俺あんまり興味ないんだよな」「小さく楽しく、笑えればいいと思っているから」「そういった、夢のない男はきっと不幸になるわね、やるって決めたら、やる、それができないならなんの為に勉強してるのかわからないじゃない」「それはそうだけどね」ツネは革命するか、迷ったが、ゲームで食べていく自信がなかった。そしてバンのアイデアはどんなだろうと、僕なりの革命のアイ

デアを考える事にした。そしたら授業は終わっていた、そして昼休みになった。バンが教室に入って来た。「行くぞ」「お前どんなアイデア考えたんだ?」「これからベランダで話すよ、さあ、行こう」「俺は授業中、考えたんだけど、なんかいいのでなかったんだよな」「以外にお前頭硬いのな」「それより、隣の子と話したぞ、面白いって言われた」「俺も話した、やる時はやれて」「男ならやるしかないよな」ベランダに着く「おう、待っていたぞ、空ってでっかいよな、ほら、俺の隣に来いよ、ツネ」ツネはウニの横に行く「あそこが俺ん家だ、見えるか」「どこだ?」そして、ウニがベランダからツネを落とす。「あっ」「ツネー」バンはツネが落ちていく姿を見た。それはなんだか笑っていた。そして、「バンー」とツネは叫んだ。バンはあまりの突然すぎる死に怒るに怒れなかった。ウニを殴ろうかと思ったが、あまりに突然すぎて頭が真っ白だった。ウニは捕まった。そして翌日、通夜が行われた。俺は泣いた、そして、その足で亡くなったベランダへ向かった。そこに線香に火をつけ、買った日本酒を垂らした。俺も死んじゃおうかな。ここから落ちればまたツネに会える。そしたら、ツネの声が聞こえた。「俺の分まで幸せになってくれ、それとオハの事を頼む、あいつ1人じゃ何もできないからな、勉強会はお前の家で毎週やってくれ、エリは生意気だけど、しっかりしてるからな。裏でお前の事気についているって言っていたぞ、お前好きなんだろエリ、だから、諦めるなよ。それと俺の家族によろしく頼む、たまに行って笑わしてやってくれ、死にたくなかった、本当に死にたくなかった、今までありがとな。

## そして

---

僕は生きる事に決めた。死が怖い訳じゃない。ツネが待っている、そしてツネが僕を見守っていてくれる、それが僕の心の支えでもある。僕はツネの夢だったゲームクリエイターになる事に決めた。ツネの母に無理を言ってPCをもらう事にした。「ツネの分まで頑張ります。僕、ゲーム作ります」ツネの夢だった、ボタンを押すと歌詞ができる「TuneBotan」を作った。タイトルを入れるだけであつという間に歌ができてしまう。しかも俺が歌を大体操作しているんだが、それは全部ツネへのメッセージである。いつか僕がああの世に行って、またツネと何も話さないかもしれないかもしれないけど隣に一緒にいたいのが為に、、、。

## おわりに

この作品はいつも友達の隣にいた僕を反映させました。学生時代、あんまり喋らないキャラでバスケばかりやって、学生時代を楽しめなかった、だから今の学生に学校で楽しんで欲しいなって思ってこの作品を作りました。学校ではいろんな行事があります。つまらない時間を過ごした僕ですが、つまらないとってしまうとどーしてもつまらないです。僕はそれを後悔しています。その行事を目一杯楽しくなるように、生きるって楽しいなって思って貰えれば幸いです。僕は馬鹿キャラだったけど、ここまで勉強を沢山してこうして発表できるまでになりました。今では学生の時、勉強してれば、もっとお話していれば、もっと楽しかったんだなって思います。今からでも取り戻せるので、僕も頑張るんだけどね。皆さんが楽しい人生でありますように。それでは、どこかでお会いできるのを楽しみにしています。ありがとうございます。

Mooicco9